

2021年1月31日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「からし種」

聖書：マルコによる福音書4：30～34

イエスは、神の国を「からし種」に譬える。ここは、小さいものが大きく成長することを言っているのか？ この「からし種」とは、「からし菜」のことである。からし菜は日本でもよく食べられる野菜。パレスチナ地方のからし菜は、2種類ほどあり、どれもどんなに成長しても、せいぜい2メートル程度。確かに他の野菜よりは背が高いが、驚くほどの高さではない。それにはからし菜は一年草で、一年経つと枯れてしまう、その程度のもの。「神の国」を譬えるにすれば、何とも頼りないものである。

何故、イエスは神の国を「からし種」「からし菜」の野菜に譬えたのか？ もし、小さなものが大きくなることを強調したいのであれば、何十メートルにも成長し、何十年も生き続ける大木に譬えたら良かったかと思う。この地域には、糸杉とかレバノン杉といった大木になる木もある。小さなものが、大きくなるということであれば、そのような植物を用いて譬えたはずである。

では何故、「からし種」か？ この頼りないからし菜も成長して、「空の鳥が来て枝に巣を作る」という。「空の鳥」とは、伝統的に「寄る辺のない小さな人々」を指す。より所のない小さくされた人々のことであるが……。

小さくされた人々が、互いに助け合いながら生きて行く姿がそこに見えてくる。宿すほうも、すぐにまた、枯れてしまうものでありながら……。精一杯生きている姿がこの「からし種」「からし菜」の譬えの出来事から見えてくる。イエスは、そのような世界に「神の国」はありとおっしゃっている。

私たちの社会には、小さくされている歴史、現状がある。常にからし種のように小さい状況に置かれている人々がいる。イエスはそこにこそ神の国はありと、励ましと希望を語っておられ、そこに注目していくことの意義を、福音として語っておられる。(神谷)